

同志社を離れての感想

久永省一

同志社での長い歳月は、私にとって、「光陰矢のごとし」ではなかった。同志社中學生として、同志社に入學したのが大正の終わり。それより前にも、私は日曜学校の生徒として、チャペルの窓のステンドグラスを通して流れこむ五彩の光を見ていた。私は、同中を出てから、同大の予科へ進んだ。ところが途中で病氣をしたこともあって、私は七年もかかって大學を卒業した。そして同中に奉職したのが昭和の十三年。戦争の末期に二年ほど海軍に勤務して、終戦とともに中学に復帰。二十二年には學制改革で、旧制中学は新制の中高に分離。二十四年に私は岩倉の高校へ。そして三十四年に同中にもどり、今春やっと定年退職をしたわけである。だから私は約半世紀、同志社にどっぷり身を浸していたことになる。その間、時間はとても矢のようにではなく、幾度も屈折しながら、比較的、緩慢に過ぎていった。

それで私は、同志社という広域の中の、河を渡り、野を踏み抜け、谷道を這い詰め、峠を越え、それも幾

つもの峠を越えて、やっと今、定年に迎りついたような実感がしている。同志社の真実、同志社の良さについては、これまで幾たびも生徒たちに向かつて語ってきたものの、今それを繰り返し述べようとすると、自分の甘えが出そうで恥ずかしくて書けそうにもない。

同志社を離れて一ヶ月になり、外から距離をおいて同志社を眺めると、その欠点や短所が透かされて見えてくるのであるが、しかしそれはまた同時に、私の欠点、短所なのであるから、それもまたベンの先にはとばしてはこない。あとに残るのは、私を老齡期まではぐくみ、養ってくださった同志社に対する感謝の思いだけである。

これからは、一昨年からはじめている仕事に身を入れてゆきたい。創業から戦後までの同志社につながる埋もれた写真の発掘と、複写と、その文庫をつくることである。お力添えをいただければ幸甚です。

(元中学校教諭)

三題ばなし

向井芳樹

この三月、木下順二さんの戯曲『風浪』の舞台である熊本へ、その素材を調査に出かけました。「神風連」のことなどが中心だったのですが、そこに扱われているジェインズの洋学校の建物や、「奉教之碑」のある花岡山を歩いてきました。

入社式の折に、それらの風物が、同志社創立の折のゆかりのものとして、紹介されているのに出会い、数日前に、その地をおとずれていた自分の、それらとのつながりを十分に意識することのなかった、のんきさかげんに恥じ入っていました。

そんなことがあったからでしょうか、先日、講義の折に、熊本の話に脱線して、「熊本バンド」を知っているかと、学生に問いかけたところ、知っていそうな顔をしないで、「わが同志社百年の歴史」に及びながら、その解説をする所まで尾ひれをつけてしまいました。入社式のことを思い出すと、おこがましい限りでした。

どうも、世代のせいでしょうか、あるいは個人的な

性格のせいでしょうか、情動的野党派根性から抜け切れなくて、それが「とりえ」だなど居なおっている自分が、はずみとはいえ、「わが同志社」などと知ったかぶりをするのは、教師気質があるにしても、我ながら意外のことでした。

自分の調べたり、考えたりしていたことのすぐ近くに、同志社の歴史があったからなんだろうと、勝手に結びつけております。

近松の浄るりと、俊寛・景清らの流人譚と、木下順二の戯曲と、「三題ばなし」風にならべて、もっている、きわめて恣意的な私の関心の中に、わが学び舎の歴史が、「熊本バンド」を契機に、あらたに、つけ加わってきそうな気がしております。

どうせ、のんびりものの私ですから、「四題ばなし」風にしかならないのですが、骨を埋めるつもりはこの環境の中で、気ながにやっていくつもりです。

(大学文学部教授・東京都立大学大学院修了)

女子中高一ヶ月

生形貴重

女子中高の教師となつて、またたく間に一ヶ月がたちました。三月に同志社大学大学院を修了し、再び母校を生活の場とすることに、非常な喜びと誇りを感じております。国語科の先生方やその他すべての教職員の皆様には、とても暖かくお迎えいただき、しかも二年生全クラスの古典をうけもたせていただくという、重い責任をお与えいただいたことは、緊張の続いた不慣れな毎日の、大きなげみになりました。新人・ベテランの差別無く、共に教育の場を創り上げようとする熱気さえ強く感じられ、充実した日々を送ることが出来ました。

さて、昨年度は講師として香里中高でお世話になっていましたでしょうか、今度の職場での授業は、最初とまどいの連続でありました。どのような生徒の反応にせよ、私にとっては逐一新しい経験でした。時には仰天させられる程のいたずらもあり、それに対してどう反応すべきか、少々とまどうことも度々ありまし

た。しかし、驚いたこと、いや感動さえ覚えたのは、生徒のけじめの良さです。蜂の巣をつついたような賜やかな時でさえ、いざ授業の内容に入ると、急に真剣なまなざしでみんなが私の話に耳を傾けます。

一日とさえ欠かすことのない礼拝等、本校の優れた伝統の生み出した大切な財産だと感じています。

毎日の授業では、今、ヤマトタケルの物語と老子とを扱っています。今一番気にかかることは、自分の理想とする古典教育の姿が、まだ漠^ぼとしていることです。ともすれば言葉の注釈にのみ流れはしまいかと注意しています。文学のおもしろさや固有の味わいを、心で感じ、言葉で表現することの出来る豊かな人間性を、どう育ててゆくのか。また、教育と研究とをどう自己の内面に統一しつつ生きてゆくのか。私のこれからのテーマでもあります。

(女子中・高教諭・同志社大学大学院修了)